

脇侍仏迷説

(この恐るべきオリジナルチャー)

大阪大学 名誉教授 大 西 巖

脇侍仏は本尊の両脇でスタンバイの役目を果しておられる仏像である。釈迦如来には普賢、文珠などが、阿弥陀如来には勢至、観音、薬師如来には日光、月光などの諸菩薩さまがおつき遊している。本尊一人だけでは淋しかりうと思っ
てか、あるいは拝む人に力学的安定感を与えて美やありがたさを強調するためのアレンジであったかも知れない。何れにしても脇侍仏は本尊によって選ばれているものと考えて、別に怪しまなかつたのは筆者一人ではなからう。しかし高松塚古墳が発掘され、壁画が出現するに至って、薬師三尊の組合せ起源に対する筆者の考えは根底から変ってきた。

奈良西ノ京の薬師寺は発願後17年を要して697年飛鳥清見ヶ原に建立されており、高松塚古墳とは時代的にも距離的にもかけはなれたものでない。一方、高松塚古墳の壁画には東西南北即ち青龍、白虎、朱雀、玄武（四神の一、北方の神、亀の形で現わす）の四神に太陽と月、それに16名の従者がえがかれている。古墳は通溝の古墳群に似ており、四神は江西の四神像に似ると称されているが、われらの祖先は大陸文化を吸収し、独自の日本文化として、培養、開花させてきた。天井の星座などは将に日本独特のものときく。しかし指導者の中には単に高句麗とは限らず、海外から帰化した人々のあったことは想像に難くない。

高松塚古墳に近く、ののくま 陰隈一帯を本拠とした蘇我氏系やまとのあやまつけんの帰化集団に東漢末賢きふみのむらじがあった。黄文連本実もとみは東漢氏やまとのあしの出であり、倭画師とも称され、当時の文化面のリーダーとして業績が大きかった。文武陵の石室、石棺のデザインは彼によるものであり、また唐から水時計を持ち帰って天

智天皇に献上したとも言われている。さらに薬師寺へ仏足石のサンプルをもたらしたのも彼であつたらしい。

中国でも朝鮮でも四神は死者を埋葬する鎮魂の象徴であり、新しい世界を死者に与えようとの考えかららしい。何故、日本に限って、これが7世紀末の寺院に突如として現われたのかは謎であるが、薬師寺本尊台座の四神像に黄文連らの貢献がなかったとは言い切れないだろう。とにかく、地下に秘められていた古代文化は仏教文化として地上に出現した次第である。

紙数の都合上結論を急ぐが、薬師如来なるがために日光、月光の両菩薩が脇侍仏としてついたのでなく、本尊台座に四神あるがための日光、月光であろう。従って台座に四神なき本尊に日光、月光のつくことはおかしいのであり、また台座に四神あらば本尊が薬師でなくても脇侍に日光、月光の両菩薩がついてもよい筈である。

国技の相撲は南洋、中国の何れから日本に入ったかは詳らかでないが、日本文化の中ではぐくまれ、今日の形態を整えるに至っている。土俵には青ふさ、白ふさ、赤（朱）ふさ、黒（玄）ふさの四神があり、清めの塩を撒く。さて太暈と月は何処にありやと探せば、これらは行司の軍配に書込まれていた。このように日本では地下文化は仏教文化へ、そしてさらにスポーツ文化へと素晴らしく進展している。そう言えば横網の土俵入りは露払い、太刀侍の脇侍仏を従えた三尊ではなからうか。